第２４号
２００９年６月２４日
日本バプテスト連盟 宣教部 教会音楽室
新生讃美歌ニュースレター
NEW SONG

生活のただ中に賛美を

理事長　田口昭典（金沢教会牧師）

かつて聞いた話である。韓国のクリスチャンは祈り、台湾のクリスチャンは賛美する。そして、日本のクリスチャンは議論をする、と。少々こじつけの感があるが、その傾向を良く表しているかも知れない。また、こんなことも聞いた。日本のキリスト教は、頭はドイツ制、体はアメリカ製だ、と。これは、神学と実践の統一性に欠けていることを意味しているかも知れない。

ならば日本のバプテストの信仰告白とその実践はどうあるべきであろうか？と自問してみた。矛盾無く調和を保っているだろうか？　調和などとんでもないほどにバラバラである。そして教会には、私と同じように、様々な考えと課題を持ち、同じ主を告白するのにも様々な表現をしている人たちが集まっている。金子みすずの童謡詩にある「みんなちがって、みんないい」などと言っていたらバラバラになって、空中分解してしまうかも知れないほどバラエティーに富んだ人たちが教会に満ちている。年齢も職業も、性別も、家族構成も、指向も、生立ちも、異いの方が圧倒的に多い人の群れである教会は、何処で一つにされているんだろうとしばしば思う。

私たちはただ、主にあって一つなのだ。この事を実現して下さるのが、聖霊の神さまである。言い換えれば、十字架で贖いの死を遂げ、復活して今も私たちと共におられるイエス様の御霊である。これ以外の所に一致の場所はない。そして、そのことを深く実感し、体験する場が礼拝である。礼拝で、賛美する時、御霊が私たちに直接に働きかけて下さり、私たちが一つであることを知性・理性を通しても、精神的・感情的・霊的にも、そして、身体的にも理解させ、体験させて下さる。

詩編２２編に、「しかしイスラエルのさんびの上に座しておられる　あなたは聖なるおかたです。」（口語訳22:3）、「だがあなたは、聖所にいまし　イスラエルの賛美を受ける方。」（新共同訳22:4）と記されている。ここには、賛美のあるところに神がおられ、神はその賛美を喜ばれることが証しされている。私のお気に入りの賛美歌の一つに、新生讃美歌6番の『主の名によりて』がある。中田春子さんの詩と大谷レニー先生の曲がとてもマッチしている。歌えば歌うほど、主の恵みを思い返し、心が熱くなるし、元気が出る。そして、また、これが私の、否、私たちの信仰告白になるのだ。賛美は力だ。私たちを結び合わせ、神の恵みを証しさせ、信仰の交わりと伝道へと押し出す力がある。なぜなら、賛美のただ中に、主ご自身がおられ、賛美にはみ言葉と祈りが組み込まれているからである。

この賛美が、毎日の生活の中で口ずさまれることが大切なのだ。個人的に聖書日課を励む時、その時にも賛美を。賛美を歌う時、私たちは傍らに主がおられることを確信して良いのである。

第８回　「バプテストの主張」と新生讃美歌
～バプテストの賛美歌集100年目の復活～

北島　靖士
『新生讃美歌』（８９年版）　編集委員
新生讃美歌編集委員会委員長

わたしは、89年版『新生讃美歌』他分冊の編集にかかわりました。またクーパー音楽主事が休暇で帰られた1年間代理を命じられて、その間に合唱曲集『信仰の歌』の一冊を編集したこともありました。現行の『新生讃美歌』(2003)の編集委員にも指名されたのはそのような経験があったからではないかと思います。89年版賛美歌編集委員は「将来(10年後を目途に)、教会の礼拝など全ての用途に用いることの出来る賛美歌に改訂する必要がある」いうことを連盟理事会に要望して解散しました。

その改訂新生讃美歌委員会の委員長を互選するときに、この賛美歌はあくまで教会で用いる賛美歌であるから牧師がなった方がよい、という理由で委員長を務めることになりました。選ばれた委員や事務局は多士済々というべき方々で構成されていました。その外にも労力を惜しまないで、多くの専門家の方々が協力してくださいました。その努力が実って、14年後、ようやく完成を見たことは感謝以外の何物でもありません。

編集にあたって留意したことの一つに「バプテストの主張」があります。日本におけるバプテストの賛美歌には1896年A. A. ベネットが編集した『基督教讃美歌』がありました。しかし、まもなく各派共通の『讃美歌』(1903年)に吸収されてしまいました。ですから、『新生讃美歌』(2003)は丁度100年目のバプテスト賛美歌集復活ということになる。この事実は発行当時あまり注目されませんでしたが、記憶しておかなければならないことと思います。

これからの新生讃美歌の課題について触れたいと思います。先ず歌詞のことです。発行当初から「平和」(現在の世界の諸課題を含む)に関する歌が少ないのではないか、という指摘がありました。バプテスト連盟には

～　新生讃美歌のあゆみ　～

日本バプテスト連盟創立	1947年
「新生讃美歌Ⅰ」	1957年
「新生讃美歌Ⅱ」	1963年
「新生讃美歌Ⅱ」改訂版	1966年
「新生讃美歌Ⅲ」	1982年
「新生讃美歌Ⅳ」	1984年
「新生讃美歌」	1989年
「新生讃美歌増補Ⅰ」	1997年
「新生讃美歌増補Ⅱ」	1999年
「新生讃美歌」改訂版	2003年

平和に関する優れた説教、メッセージが少なくありません。以前のものでは『分かれ道に立ってよく見』や、最近『時のいましめ』などに掲載されています。『新生讃美歌』が礼拝における賛美を中心としたものならば、当然、メッセージとの連携を考えなければなりません。メッセージの詩的性格、賛美歌のメッセージ性を重視した新しい賛美歌ができることを期待します。

「交読文」は89年版の2倍近くに増やしましたが、まだまだ足りません。最近作られている「連祷（リタニー）」なども厳選の上で、採用すれば面白いでしょう。交読文に続いて「朗読文」があります。現在の朗読文は「十戒」だけですが、当初は「使徒信条」も考えられていました。使徒信条は「主の祈り」「十戒」と共に「三要文（さんようもん）」と言われて来ました。N.ブラウンが編集したバプテスト最初の賛美歌集（礼拝指導書）『聖書之抄書（せいしょのぬきがき）』(1874年）にも「しんずること」として採用されています。理事会では最終的に「バプテスト教会は信条教会ではない」という理由で不採用になりましたが、再検討すべき課題です。

もう一つは、見返しにある「主の祈り」と「教会の約束」です。主の祈りはもうそろそろ子どもたちも意味がわかって、一緒に「わたしたちの父よ」と祈ることの出来る新しい訳が考えられてもよい頃だと思います。筆者の教会では十数年前より新共同訳マタイ6章をそのまま使っています。「教会の約束」は丁度理事会においても改訂が考えられていましたので、一緒に作業することになりました。その性格と使用法についても触れた方がよいということになりました。そこで、『教会員手帳』 にはわたしが「註」を書かせていただきました。 この註は『新生讃美歌』 にもある方がよいのではないかと思います。

（三鷹教会主任牧師）

この１曲　～私の好きな新生讃美歌

７３番　「善き力にわれ囲まれ」

田隈教会　須藤伊知郎

ドイツに留学していた時、青年の家庭集会でよく歌った賛美歌です。

ヒトラー暗殺計画に関わった廉で投獄されていた作詞者のD.ボンヘッファーは、1944年暮れに、この詩をクリスマスの挨拶として婚約者に贈りました。その三ヶ月後に彼は処刑されてしまうのですが、そんな絶望的な状況の中にあって「望みを主の手にゆだね／来るべき朝を待とう」と希望を歌います。それは「われらの闇の中に」「主のともし火」が輝いていること、「夜も朝もいつも神は／われらと共にいます」ことを確信しているからです。

この歌を歌う度に、ロウソクのともし火に照らされて、ギター伴奏で祈るように声を合わせていたドイツの友人たちのことを想い起こします。

５７０番　「たとえばわたしが」

函館教会　本田依子

私と賛美歌との出会いは小学校の４年生の時。音楽教師をしていた母に育てられましたから、歌うこともピアノ演奏も好きでした。私がクリスチャンになったのは大学２年の時ですが、その時から既に教会に対する不満がありました。やがて私は教会の生活に疲れを覚え、行き詰まりを感じるようになりました。

大学三年生の時に「あしあと」の歌詞と向き合った時、私の中の何かが変わって、神様もう出来ませんという悶々とした気持ちから、安らかな気持ちへと変えられ、再び神様を見上げようという気持ちが湧き出て来ました。

これを境に自分の音楽に対する考えが、単なる演奏から、神様感謝しますという「自分の気持ちを表現する手段」へと変えられていったのです。

４９８番　「イエスに勝る友」

花小金井教会　廣島　尚

２３年前、仕事でダラスにいた私たち夫婦は、日本語教会で信仰に導かれました。当時は特伝で聖歌隊が歌うと、残っていたのは講師だけということがよくありました。教会では聖歌を使っていて、同年代の友人と３人でよく賛美しました。「いちど死にしわれをも（新生550）」、「いわなるイェス（新生545）」など、車で５～６時間かけて伝道旅行に出かけるときに車内で大声で歌ったものです。中でも私が好きだったのは「イェスはわがいのち（新生498）」でした。

日本に帰ってきてから聖歌を歌う機会はなくなりましたが、歌詞は違っても『新生讃美歌』の中に懐かしい曲があるのは、あの頃を振り返るようでとてもうれしいものです。

９５番　「無限の神の愛」

泉教会　大矢公子

『新生讃美歌』（2003）専門委員として働きに加えていただいた折、「中国の賛美歌を訳してみて」と渡されたのがこれです。

「The long-lasting love of God」という英語の詞と「神愛长歌」と中国語で書かれたものを2種類見比べながら、暫く頭を抱えて祈ったのを覚えています。

“神の愛は長く続く”それとも“永遠に”？ と訳を進めるうちに、そんな言葉では表しきれない神の愛に驚きを覚えました。

夫の友人の中国人に丸ごと意味を通訳していただき、中国語の「长」には「無限」の意味もあることを知りました。

「神の愛の深さも広さも近さも無限。」私の信仰告白です。